

## 「複製技術時代」におけるソニア・ドローネー の絵画とファッションの関係



## 研究目的

ソニア・ドローネーはロシア出身で、絵画、応用美術、デザイナー活動など、実に様々な活動をしたパリの女性芸術家である。彼女の出発点は、画家であったが、現在ではむしろデザイナー(舞台衣装、室内装飾、服飾デザイン、本の装丁)としての活動の方が注目されている。そこで、20世紀の「複製技術時代」における彼女のメカニクな抽象絵画とファッションの関係性を、様々な美術館が所蔵する作品を通して具体的に比較検討したい。また、彼女の芸術は、夫で抽象画家のロベール・ドローネーの作品からも影響を受け同時に与えたとも言われているので、その夫との関係性も彼女の作品から読み取り、考察したい。

## ソニア・ドローネーについて

ソニア・ドローネーの作品を語るにおいて大切なキーワードがふたつある。それは、「シミュルタネ」と「服飾芸術」である。

「シミュルタネ」とは、「同時の、同時に起こった」を意味する言葉であるが、ソニアが自身の作品においてこの言葉を初めて用いたのは、1912年に描いた《同時対比(コントラスト・シミュルタネ)》(油彩)であった。それ以後、ソニアは積極的にこの言葉を掲げながら制作活動をしていくことになるのだが、そこには、夫で画家のロベール・ドローネーの影響があった。1907年ごろから、ロベールは色彩の対比効果に着目したシュヴルールの色彩理論「同時対比」の研究を始め、1912年ごろから「シミュルタニスム」を提唱するようになる。そのロベールによるシミュルタネの芸術の定義は、芸術に始まり、彫刻、家具、建築、書物、ポスター、衣服等に及ぶ新しい「メティエ(仕事、技巧)」であり、運動の概念をも内包するものとされた。ソニアは、ロベールがこのように定義した「シミュルタネ」の芸術を、実際に自身の制作活動のなかで展開していく。

「服飾芸術」とは、ソニアが自身の衣服製作において使った言葉である。

彼女の衣服製作のなかで、今回の研究テーマにおいて重要なキーワードとなる「複製技術時代」を感じさせる活動がある。それは、1927年に高級メゾン「レッドファン」と共同で販売した既製服、「ティッシュ・パトロン」である。この衣服は、必要な型紙と装飾が全て描き入れられた一枚の布地の状態で販売され、着用者が自分で仕立てることで、低価格で高品質な衣服を実現する、モードの大衆化を見据えたものであったとされる。

## 各調査場所での研究成果

◆ルーヴル美術館・・・19世紀以前の絵画の調査を行った。

「19世紀以前の絵画」～「19世紀の絵画」～「ソニア・ドロローネーが活躍した20世紀の絵画」と、その題材や色彩などの点から絵画の変遷を確認するにあたり、その最初の時代となる19世紀以前の作品を主に所蔵しているルーヴル美術館を訪れ、調査した。ここにある作品は、ほとんどが写実的であり、また、宗教画のように、明確な意味を持った絵画が多いように感じた。



ルーヴル美術館(外観)



ウジェーヌ・ドラクロワ  
《民衆を導く自由の女神》  
1830年



フォンテーヌブロー派(作者未詳)  
《浴槽のガブリエル・デストーレ姉妹》  
1594年

◆オルセー美術館・・・19世紀の絵画の調査を行った。

ここでは、ルーヴル美術館の所蔵作品との比較によって、絵画の大きな変化を感じることができた。それは、印象派の登場である。19世紀に登場する印象派の作品を多く所蔵するオルセー美術館では、それ以前の絵画との移り変わりをみることができた。それ以前の

絵画と印象派絵画の違いは、写実性が若干失われること、つまり、より抽象的になることである。また、印象派絵画は、光を描いた絵画であることから、色彩にも違いを感じた。

(オルセー美術館は写真撮影禁止だったため、作品の写真を撮ることはできなかった。)



オルセー美術館(外観)



オルセー美術館(内部)

◆ポンピドゥー・センター(国立近代美術館)・・・ソニア・ドローネー、ロベール・ドローネー、その他同時代の画家およびそれ以降の芸術家の作品の調査。

ここでは、ソニア・ドローネーに関する多くの作品をみることができた。また、彼女の夫であるロベール・ドローネーや、同時代に活躍した画家たちの作品もみることができ、それぞれを比較することもできた。ソニアとロベールの作品を比較して、最も顕著に違いが出ていたのは、2人の筆の運びである。2人の絵画はとても似ているのだが、ロベールの絵画には緻密さが、ソニアの絵画には勢いと躍動感があるように感じた。

特に、《バル・ビュリエ》(1913年)という作品は、踊る人々が色彩のなかに溶け込んでいるようで、人と色彩の境目はほとんど分からないものであった。「バル・ビュリエ」とは、ソニアとロベールが通っていたダンスホールのことで、彼女がこの作品を描いたころ、パリではタンゴが流行していた。そこで、バル・ビュリエで踊り興じる人々を描いたのがこの作品である。この作品を制作する中、ソニアは最初の衣服《ローブ・シミュルタネ》(色とりどりの様々な素材の生地を使い、パッチワークの手法で制作された衣服)を完成させ、これを纏ってバル・ビュリエを訪れた。その新鮮な衣服は注目を集め、詩人サンドラールはその時の感激をあらわした、「ドレスの上に彼女は肉体をはおる」と題した詩をソニアへ捧げた。彼女は、この詩と共に、女性の身体と衣服の関係性を表現することに関心を示すようになる。その後の1920年代中ごろ、テキスタイルが花模様から幾何学模様へと移行すると同時に、女性の身体が曲線的なシルエットから直線的なシルエットへ移行する。幾何学模様の衣服は、それをまとう女性の姿や動きによって様々な表情をみせた。《バル・ビュリエ》をみて私が感じた躍動感とは、ソニアが、踊る人たちの動きに合わせて、衣服の色彩も、様々な表情をみせながら踊っている様子を描いたことから生まれたものであろう

と思う。よって、この作品は、彼女の衣服製作に最も関係がある絵画だと考えられる。

また、同時代に活躍したキュビズムの画家たちの作品と、ソニアやロベールの作品を比較した際、分かることは、やはり色彩である。キュビズムを代表するピカソやブラックの作品は、主に黒や白や茶色など、比較的暗い色を多用しているのに対して、ソニアやロベールの作品は、圧倒的に色彩が多く、鮮やかである。



ポンピドゥー・センター (外観)



ソニア・ドローネー《電光のプリズム》1914年



ソニア・ドローネー《バル・ビュリエ》1913年



ソニア・ドローネー《jeune fille endormie》1907年



ソニア・ドローネー《philoméne》  
1907年



ソニア・ドローネー《jeune italienne》1907年



ソニア・ドローネー《Composition》1955年



ロベール・ドローネー  
《詩人フィリップ・スーポー》  
1922年

◆モード&テキスタイル美術館・・・19、20世紀衣装の調査。本屋で資料探し。

ファッションの展示は少なかったが、一風変わった衣服を見ることができ、興味深かった。特に、生地にあらかじめポケットやベルトなどの装飾風の絵柄が書き入れられているような衣服があり、実際、それとしての役割は果たしていないが、それがデザインとされているのは、おもしろいと感じた。ポケットやベルトなどの装飾が当たり前になっている現代の衣服だからこそ、考えられるデザインだと思った。

ここは、本屋も併設されており、ファッションやデザイン関係の書籍が多数取り扱われていた。そのなかで、ソニア・ドローネーのデザイン画柄のポストカードを入手した。



ソニア・ドローネーの  
デザイン画柄のポストカード  
(アルバム《ガスで動く心臓》1977年より)

#### ◆「MORABITO」アトリエ見学

モラビト ジャパン代表取締役の阿部パーシー令さんから、鞆をつくることにおける複製技術(機械)による生産と、手作業による生産の違い等についてのお話を聞き、制作体験もさせていただきました。

MORABITO では、ほとんどの鞆の制作を手作業で行っており、制作体験では、その中の一行程である皮を縫う作業を体験させていただきました。私が縫ったのは縫い目二つ分ほどだったが、特殊な縫い方で、非常に難しかった。阿部さんのお話と、制作体験から、ファッションにおける複製技術について考えた。手作業は機械の何倍もの時間がかかるし、その分人件費がかかり、鞆自体の価格も高価になる。しかし、その分良質のものができるし、それを欲するお客様がいる。ほとんどのブランドが機械に頼る生産をしているからこそ、生まれるニーズであると考え。

#### ◆BIBLIOTHEQUE FORNEY

資料探し。ロベール・ドローネーについて書かれた一節を見つけた。

#### 19世紀以前～19世紀～20世紀以降と時代ごとの絵画を調査してわかったこと

ルーヴル美術館とオルセー美術館、ポンピドゥー・センター(国立近代美術館)において感じられる、時代の変遷における芸術作品の変化は、写実性が失われること(より抽象的になること)と、色彩である。18世紀と19世紀の絵画においてのもっとも大きな変化は、印象派の登場である。19世紀と20世紀以降の芸術作品における変化は、ピカソやブラックなどのキュビズムが誕生したことである。19世紀以前の絵画では、人は人として、それがそれとわかるように写実的に描かれているのに対し、19世紀の印象派絵画では、光を描くことを重視したため、写実性は失われる。しかし、色彩の面では、印象派絵画のほうがより鮮やかになったといえる。そのような19世紀絵画に対し、20世紀絵画は、特にキュビズム絵画では、写実性がほとんどみられなくなり、白や黒、茶色、グレーなどの暗い色が用いられ、鮮やかさは失われる。しかし、キュビズムの画家たちと同時代を生きた画家、シミュルタニスムを説いたソニア・ドローネーとロベール・ドローネーは、とても鮮やかな色彩を用いて幾何学模様を描き、抽象絵画を完成させた。

#### まとめ

今回の研究旅行で、ソニア・ドローネーの絵画とファッションデザインについて調べてみて、彼女は複製技術時代のファッションの先駆けであり、絵画とファッションデザイン

を強く関係付けた人物であることが分かった。彼女は、絵画とファッションについてつぎのように語っている。

「今日の絵画における動向は、室内装飾や映画、そしてすべての視覚芸術に影響を与えているようにモードにも影響を及ぼしています。そして画家たちが一世紀もの間、探し続けてきたこの新しい原理に従わなかった者は、すべて時代から取り残されています。それにもかかわらず絵画における動向はこれらの新しい色彩の関係についての探求の入口に立ったにすぎません。いまだ神秘に包まれたこれら色彩というものは、現代的な視覚の根底を成すものです。人は色彩をより豊かなものにし、補足し、発展させていくでしょう。それは私たちが続けていこうとしているものとは別のものなのかもしれません。しかし、もう後戻りはできないのです。1)」

このように、彼女自身も絵画とファッションは強く関連付けられるものであると感じており、彼女の絵画とファッションデザインからそれを感じることができる。

今回の研究旅行では、ソニア・ドローネーを中心とし、その前後の時代の絵画と彼女の作品との比較や、彼女の作品のなかでの絵画とファッションデザインの比較、また、ロベール・ドローネーの作品との比較等もすることができた。これらの成果を、これから、卒業論文のテーマ設定や作成に生かしていきたいと思う。

## 感想

今回の研究旅行に参加させていただいて、本当にたくさんの経験ができました。主な研究場所としていたガリエラ美術館が、改装中で調査できなかったことなど、トラブルもありましたが、たくさんの方のお力をお借りして、言葉の壁を感じながらも、自分の考えをなんとか伝える難しさ、そしてそれが伝わった時の喜びを感じたり、また、普通の旅行ではめったに体験できないことをやらせていただいたり、本当に有意義な旅になりました。

最後に、今回の研究旅行奨励制度において、いろいろとお世話をしてくださった国際文学部の先生方、関係者の方々、ゼミ担当の後藤先生に、この場を借りてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

参考文献

『ソニア・ドローネー 服飾芸術の誕生』 発行日：2010年9月15日 著者：朝倉三枝  
発行者：橋本愛樹 発行所：株式会社ブリュッケ

1)の引用は、本書の p.291

『ソニア・ドローネ』 発行日：1995年4月10日 著者：竹原あき子  
発行者：野口佐和子 発行：彩樹社

『カップルをめぐる13の物語 上 創造性とパートナーシップ』 発行日：1996年3月11日  
編者：ホイットニー・チャドウィック、イザベル・ド・クールティヴロン  
訳者：野中邦子、桃井緑美子 発行者：下中弘 発行所：株式会社平凡社